

「いくらまわされても針は天極をさす」 彫刻家の高村光太郎の言葉です。

コロナ禍で、急激な売上減少に見舞われて努力の限界を超える苦勞をする。先行き不透明な現状の中で、どう対処すればいいのか一人悩み苦しむ。このまま進むべきか、今こそ撤退すべきか、重要な判断を迫られる。信頼していた社員が辞め、身を引き裂かれる悲しい思いをする。これでもか、これでもかと、次から次に難題が降り掛かって来ます。

そんなとき、社長の心を支えてくれるものが、「片言隻句」です。自分にとって「天極」とは何か。

与えられたこの命を懸けて惜しくないものを見つけたか。人生の目的・仕事の意義を明確に持っているか。人生二度なしを、肚の深い所で認識しているか。

こういう原理原則・定理・根本を持つ人はこの逆境の時に成長するのです。外部に原因を探すことよりも、自分への反省が深まります。

「治にいて乱を忘れず」という言葉は知っていたが、果たして日常の生活の中で実践していたでしょうか。例えば、利益の出ている時に、税金を払って残りを貯蓄に回していたか。出た利益の一定額は、社員さんに還元していたか。個人的な趣味や遊びを優先していなかったか。将来のため、研究開発や教育にエネルギー・時間・カネを使ってきたか。果たして、王道の経営をして来たと言えるでしょうか。

観念的な理解や、言行一致にほど遠い理解であったのなら、今こそ、社長自らが、行動を変えて参りましょう。その又とない機会を得たのです。

「今から」「ここから」「私から」未来は、確実に明るいものになります。

過去は変えられませんが、未来は変えられます。

他人は変えられませんが、自分は変えられます。

そして、自分にとっての「針」はあるでしょうか。本業での技術・道具・商品・サービスと考えて下さい。もつともつと磨いて参りましょう。

ぐるぐると回されましたが、時が来れば必ず針は天極を指すように、我々の仕事も安定の時期を迎えます。

喉元過ぎれば、熱さを忘れるのではなく、過去の苦勞が、将来をより味わい深いものになるようにすることが、コロナ禍の最大の学びではないでしょうか。

さあ社長、共に新しい一步を、夢と勇氣を持って踏み出しましょう。

今月のポイント

ぶれない判断基準を

身につけましょう

